



EMERGENCY WATCH



NO. 95 Nov 2018



神戸こども初期急病センター

2018年10月
受診者数
1473人

疾患頻度

1. 急性上気道炎・感冒	360人
2. 喘息	221人
3. 感染性腸炎	140人
4. 咽頭炎・扁桃炎	116人
5. 気管支炎・肺炎	74人

- ・インフルエンザA型5名いらっしゃいました。今シーズン初めての患者さんです。
- ・9月は40名と流行の兆しを見せたRSウイルス感染症ですが、10月は9名といったんは減少に転じております。



急に寒くなり、そろそろインフルエンザが増えてくる時期ですね。インフルエンザなどで高熱が出ると、けいれんを起さないかと心配されることが多いと思います。今回は、高熱がひきおこすけいれんの代表である熱性けいれんについて説明したいと思います。

Q1熱性けいれんとは？

6か月～5歳ごろの子どもに多く、発熱に伴い意識障害やけいれんが生じる疾患です。通常38℃以上の発熱時で急に体温が変化するとき起こりますが、成長に伴い6歳前後でほとんど起こさなくなります。日本では小児のおよそ8%にみられます。

Q2原因は？

原因ははっきりわかっていませんが、急な体温変化によって発育途上の神経細胞のネットワークが制御不能になることによって生じると考えられています。遺伝的素因の関与もあり両親に熱性けいれんがあると頻度が多くなります。発熱の原因は突発性発疹、インフルエンザなどが多いですが、高熱をきたす疾患はすべて熱性けいれんのきっかけになります。

Q3どんな症状があるの？

基本的な症状は意識障害とけいれん発作です。けいれん発作は、全身をびくびくさせたり硬直したり、逆に手足を脱力させることもあります。時に四肢の一部や体半分のみけいれんが起こることもあります。また、発作中は目は開けたまま一点凝視したり、上や左右に偏っていたりします。また顔色が悪くなり嘔吐や失禁を伴うこともあります。熱性けいれんは2つのタイプ、単純型と複雑型に分けられます。単純型は全身性のけいれんで、数分で収まり繰り返さないタイプです。複雑型は、けいれんが局所性であったり、持続時間が15分以上であったり、一度の発熱で繰り返し起こったりするものです。複雑型では、けいれんの治療や他の疾患との区別のために入院が必要になることがあります。

Q4けいれん時の対応は？

けいれん時は体や顔を横向きにして、吐物などで窒息しないようにしてください。口の中にタオルを入れる必要はありません。無理にすると喉の奥に吐物が押し込まれる可能性があり危険です。通常は数分でけいれんは収まります。けいれんが長引いたり(5～10分以上)、繰り返したり、意識が回復しないときは救急車での受診が必要です。病院では、必要に応じて抗けいれん薬投与を行い、けいれんの長期化や反復を防ぎます。

Q5予防法は？

解熱剤では熱性けいれんの予防はできません。予防にはジアゼパムという座薬が使われ、発熱の早期(37.5℃以上)に使用するとけいれんが予防できる可能性が高いことが示されています。全員に使う必要はなく、過去に長引く熱性けいれんがあった場合や、保護者の不安が強いとき、病院へのアクセスが悪い地域では使用を考慮されます。

熱性けいれんは経過が良い病気です。初めての場合、保護者は驚きあわてることが多いですが、できるだけ冷静に対応し、必要時には救急受診をしましょう。